

# 九月一日

水上瀧太郎

青空文庫



八月三十一日の夕方、朔ついたち日から学校の始まるちいさい子供達を連れて、主人夫婦は東京に帰る事になり、由井ヶ浜の曲まがりぶち淵まの別荘には、九人の人数が残る事になった。長男の一郎と、長女の甲子と、次女の乙子と、夫人の里の遠縁の者の娘で甲子や乙子の世話をする養子ようこと、一郎の同級生の澤と、女中の延のぶと鉄と、別荘番のじいやとばあやがいた。外ほかには英国種のポインタアの年をとつてよぼよぼしているのがいた。

行儀のいい事を何よりも好む、神経質で口やかましい主人がいなくなったので、いい合せたようにみんなの心持は愉快に自由に放ほうじゆう縦うになった。停車場へ送つて行つた歸りに、一郎は外の者に別れて、一の鳥居とらの側そばにいる岡部の兄きょうだい妹まいを誘つて、ホテルに出かけた。夏中その舞踏場ヒリッピンで、一郎の連中は、亜米利加アメリカの女や日本の令嬢達と踊つたが、今はもう客も少なく、比律賓ヒリッピンから夏場の稼ぎに来ていた楽手達も、小金をためて帰国してしまつて、涼しい風の来る広い板の間に並べた卓について、飲料をとる人影もなかった。それでも一郎は楽しかった。目の前に明るい顔をしている友達の妹の心を、この頃になつて、漸ようや

くしつかりと捉えてしまった確信があった。いつでも、こつちから求めさえすれば、求めるものは容易に与えられそうないきいきした希望と、流石さすがにそれに伴う軽い不安とに、若々しく、健康で、浮気な胸をおどらせていた。

一郎と別れた外の者は、滑川なめりがわに沿った砂山から海辺に出て、夕日の沈んで行く頃の、めつきり秋めいて冷い渚つめたなぎさに、下駄はだしや裸足の跡を残して歩いて行った。

中学時代から同級で、学問でも世間智でも、お坊ちゃん育ちの一郎と比べると格段に立たちまき勝っている澤は、先年父親の死んだ時、学資の關係で廃学しなければならなかったのを、

一郎の父が息子の良友と見込んで、毎月の衣食費から月謝まで補助する事になったのであった。来年学校を卒業すると、一郎は洋行するはずになっていたが、澤は主人の主宰している会社に雇われる事にきまっていた。彼は小学時代から優等生ほこりの誇りを持っていた。模範的の学生だという自信もあった。郷里では旧家として知られていたが、母は早く死に、父は政治狂で、山林から田畑まで全部を運動費につかって、幾度となく議員選挙の候補者に祭上げられたあげく、一度も当選の喜びを知らずに、一人息子を無一物に残して世を去った。夏休が来ても、帰るべき家は人手に渡ってしまったので、曲淵の一家にくつついて、その別荘にいる外には途みちがなかった。以前は対等の友達づきあいだったのが、主従とまで

は行かないでも、今では多少ひげ目を感じる関係になつてゐるので、彼の心持には始終滑なめらかでない陰影があつた。学業にこそ身を入れないけれども、何をやっても器用な運動家で好男子の一郎は、富裕に育つた友達と一緒に、夏休といえ、恋の冒険の季節のように考へて、避暑地に集る美しい娘達の噂に夢中になつてゐるのだが、澤だけは仲間はずれで、気楽な連中を羨うらやむ心持と、軽けい蔑べつする心持とを持つていた。自分はそんなのらくら息子とは訳わけが違ふのだと云う誇に頼つて、密かになぐさめていた。

しかし、彼の心の中にも、つい近頃になつて、一人の女の姿がはつきりと浮ぶようになった。それは養子だつた。

養子は曲淵夫人の里の縁類の娘で、これも不幸な身の上だつた。事業に失敗した父親が、手形偽造の嫌疑を受けて自殺した後で、継母は他へ再縁し、兄は植民地の病院医として赴任し、外に頼る処がないので、曲淵の世話になる事になつた。甲子とは四才違い、乙子とは七才違いの、今年二十一ではあるが、姉妹のためには家庭教師のような地位に置かれ、殊ことに体の弱い乙子のためには保母の役目さえ負わされてゐた。府立の女学校に通つてゐた頃は、女子陸上競技の選手として短距離競走の記録保持者レコードホルダーだつた事もある。大柄で、色の白い、目鼻立のはつきりしたのが、大勢の中や、広々とした場所では、若い男の目につ

く姿だった。一郎の友達仲間でも、少なからず問題にしていたが、養子はそういう連中を頭から馬鹿にしていた。

澤は、自分と同じような恵まれない境遇に在る養子に対して、素直な同情は先から持っていたが、恋らしい心持は最近までなかった。ひとつには、生来の己れを高く評価する性質が、不遇な人を哀れみこそはすれ、自分と同等もしくはそれ以上のものとして考える事を妨げたのである。彼はむしろ、出来る事ならば家門の正しくかつ現在榮えている家の娘を、将来の妻として迎えたいと密かに願っていた。母親似の一郎とは違って、角張った父親に似た甲子ではあるが、自分の才能を見込んでくれるものなら貰いたいと云う望を、心の奥底に秘めていた時代もあった。

それが、どうして養子を恋しく思うようになったかと云うと、やはり同じような境遇が結びつけたものと言う外はない。おまけに一方では、甲子の彼に対する態度が、先方が女らしく成熟して来るに連れて、いよいよよかけはなれたものになって来たのも、自然と彼女に対する野心とも云うべきただならぬ心を薄らがせた原因となった。

一例としては、或時<sup>あるとき</sup>麴<sup>こうじまち</sup>町の曲淵の本邸の庭にのぞんだ座敷に、甲子の友達が集っているところを、何も知らずに澤が通りかかった事があった。若い派手づくりの令嬢達の

見る目にびくびくして、耳のかげまで赤くなつて足早に過ぎたが、何かささやき合う気配を感じたと思うと、

「あら、違うわ。うちの書生みたいな人なのよ。」

と声変のしている甲子の打消すのが聞えた。続いて賑かに笑う声に追われるように逃げ出した澤は、屈辱の念に堪えられなかつた。自分とは全く違う世界の人間だと云う事が、常識の発達した実業家志望の青年の頭脳には、別段の無理もなくはつきりとわかつた。「どうせ私なんか犯罪人の娘よ。」

と、なげやりな口をききながら、腹の底にはしつかりした信念を持っていそいな養子の方が、段々親しみを増して来た。一郎にしても、娘達にしても、浮々とその日その日を遊び暮しているばかりで、取り止めた考というものは何ひとつ持っていないのに、養子とはかく学問にも実社会の問題にも多少の理解は持つていて、同じ新聞を読むにしても、音楽会や運動会の記事に兄妹が興じている時、澤と二人の話は大人の会話だつた。

「澤さんは羨しいわねえ。学校さえ卒業すれば、後は自分の腕次第でしょう。男はほんといつとも養子は口癖にして、女性の生甲斐なさを嘆いていた。気の毒な身の上と、女な

にいいと思うわ。」

がらも自力で何かしたいという意気と、世が世ならばと胸中ではなぐさまずにいながら、さばさばしたとりなりの一切が、澤には気持よく思われて来た。

殊ことにこの一箇月半の鎌倉の生活が、一層二人を親しくした。澤が食当りで五日ばかり寝た時の養子の看護は、母親の慈愛の温あたたかさを知らない青年の心には、忘れ難がたいものに思われた。いつの間にか、澤は養子に対して苦しいような慕わしさを感じるようになった。恋愛の冒険的の興味をついぞ知らない澤の事だから、恋は直すぐに将来の結婚の問題だった。身よりのない二人こそ終生の最もいい伴はんりよ侶だというような、真面目まじめくさつた考も持つていた。とにかく自分の心持だけはいい機会に打明けて、先方からもはつきりした言葉を酬むくいられたいと願つていた。心と心とが許しあつた男女の清い交際と云つた風な、感傷的な小説らしい空想が、彼の頭にはいつぱいだった。

そこに、烟けむつたい主人夫婦の帰つた後の、解放された延のびやかな心持が、もくもく湧わきか返えつて来た。一郎が友達を誘つてホテルに出かけて行く姿を、いつもならば苦々しく思うはずなのに、その日は同情にみちた微笑をもつて見送つた。

夕方の浜辺を散歩する人の数もめつきり少なくなつて、甲子を真まっさき先に、少し遅れて乙子と養子がつづき、最後に澤が、前に行く三人の後姿に興味を持ちながら歩いて行つた。



ホテルの涼場すずみばの下を通って、稲瀬川いなせのそばまで行くと、別荘の屋根が見える。そこまで行って、女達は砂の上に腰を下した。

「澤さん、休め。」

養子が大きな声で号令をかけたので、姉妹は声を揃えて笑った。

「えんやらやつと。」

澤もあかるい気持で冗談をいいながら、昼間のぬくもりの残っている砂の上に両足を投出した。

磯の日細りて更ふくる夜半に

岩打つ浪音ひとり高し

かかれるとも船人は寝たり

誰にか語らん旅のこころ

細く高い三人の肉声が、誰が始めたともなくうたい出した。澤はその傍で、初秋の澄んだ海気を吸いながら、誰でもいいから心から親しめる人のほしい、孤独感まぶたに瞼まぶたが熱くなりながら、星の出た海の上の空を、じいっと見つめていた。

四人が別荘に帰ったのは、すっかり夜になってからだだった。あかりの下で、めいめい勝

手な雑誌を読んだり、編物をしたりしているのを、縁側の籐椅子に長くなって、澤は見な  
いようなふりをして見ていた。庭先の松の林の向うに、月の出の明るい色が段々濃くなっ  
て、見ているうちにまんまるい月が、ぐんぐん空にのぼって行った。

「あら、私櫛くしを落して来たわ。」

突然読みかけの雑誌を伏せて養子が叫んだのは、大分更けてからだだった。少し旧式の大  
きい束髪そくはつに手をあてて、首をかしげたが、

「きつと先刻さつき休んだ所ですよ。その前には確かにあつたんだから。参円五拾銭落してしま  
つちやあ惜おしいわねえ。」

冗談を云いながら立上ると、縁側に出て空を見た。

「いい月夜だから、一寸ちよつと行つて見て来よう。乙子さん待つてらっしゃい。直じき戻つて来  
ますから。」

「養子さん、一人でよくつて。」

編物の手をとめて、甲子が声をかけた。

「大丈夫ですよ。こんなに明るいですもの。」  
無雑作むざうさに答えて、後姿は歩き出した。

「僕が行つて来ましようか。」

澤は、機械体操でもするような身の軽さで、椅子から飛下りると、あとを追つて庭に出た。

「いいえ、いいんですよ。自分で行きますよ。」

という女の声はつきりと姉妹の耳に聞こえたが、それきり二人とも行つてしまつた氣配だつた。

門の外の、雑草にまじつて芒すすきや野菊も延びている溝川のへりを真直ぐまっすに海に出ると、月夜のあかるさは一層はつきりしたが、西の方の空には大きな雲が重なり合つて、風も思いの外強ほかかつた。脚に巻きついたり、吹きまくられたりする白衣の裾を気にしながら、養子は先に立つて歩いて行つた。

青貝入の西洋櫛は、澤の目にも覚えのある物だつた。きつとそこに落したに違いないと、確信をもつて養子の云う幾時間か前にみんなが並んで腰を下した場所を、共々に探したけれど見つからなかつた。

「どうしたんでしょう、確かにここに違いないんですが、拾われちゃつたのかしら。」

養子は思い切れないで、幾度も同じ所を見て廻つた。父親が自殺する前に、珍しく一緒

に散歩に出た時買ってくれた遺品かたみだった。並みでない死に方をした父に対して、執拗しつような愛情を持つている養子には、なくなしては申訳がないという気持ちもあった。

「やっぱりなくなしちやつたのかしら。」

あきらめ兼かねて、砂の上に長く影を投げて佇たたずみながら未練らしく嘆息した。

「おや、雨かしら。」

たった一粒、ひやりとした頬ほっぺたに掌てのひらをあてて、澤は後の方の空を振仰いだ。先刻の雲が、月に向つてちぎれて飛んで行くのであった。

「雨ですよ。」

そう云うひまもなかった。はげしい夕立が砂地を打って落ちて来た。二人は砂山の下、昼間は海に入る人の着物を預かる葭簣よしすばり張の茶店の中にかけて込んだ。

月はまだまんまるく、高い処に澄んでいるのに、空の半分は暗くなって、なかなか雨は止まなかった。

「変な天気ですねえ、気味が悪いわ。」

「明日が二百十日ですか。」

「いいえ、あさつてでしょ。」

葭簣の隙間から落ちる雨だれに身をすくめながら、二人は別々の心持で、不思議なその晩の景色を見て立っていた。

不意に、目の前の砂浜を手を引合つて駆けて行く男女の姿が見えた。頭から降りそそぐ雨を避ける場所がないので女は軽い叫さけびごえ声をあげながら、男の力に引擦ひきずられて行つたが、間もなく大きな漁船のかげにかくれて見えなくなつた。

「今の、一郎さんでしょ。」

養子にそう云われるまでもなく、それが一郎と、その友達の岡部の妹である事は澤も認めた。何か大きな事件でも目撃したような氣持で胸がどきどきして、返事も出来なかつた。月はしばしば雲にかくれたり、又未練またらしく顔を出したが、雨はなかなか止まなかつた。頭から肩へかけて、二人ともぐつしより濡れてしまった。養子の横顔を澤はいつにも増して艶つやつや々しく思つた。

「養子さん。」

非常な努力で、澤が呼びかけた声は無慙むざんに震ふるえていた。

「僕は真面目に貴女あなたに聴いて頂きたい事があるんですが……」

ただならぬ男の語氣に、身をかたくして振向いた相手の視線に射られて、澤は言葉が詰つま

つてしまった。こんな事では駄目だぞと思いつながら、どんな態度も、どんな言葉も、この場合芝居めいておかしいものに考えられ、唇はすっかり乾いてしまった。

暫時しばらくの間、無言のまま、お互の呼吸を感じながら、二人は顔を見合っていた。

「澤さん。」

気力負けして、足下の砂地に澤が視線を落した隙を見て、余程たつてから養子の方が口を切った。

「私は犯罪人の娘ですよ。」

驚いて澤が顔を上げた時、養子は強いて笑おうとしたらしかったが、笑うだけのゆとりがなく、いきなり土砂降どしゃぶりの雨の中を、別荘の方に駆出した。

しまったと思いつながら、澤も直ぐ後から駆出した。

別荘の門に入る時には、雨はぱったり止んで、又まんまるい月が、けろりとした顔をして、滞りなく晴れた中空の風に吹かれていた。

「養子さん、櫛あつて。」

「遅かったわねえ、濡れちやつたでしょう。」

気づかっていた姉妹が縁側に出迎えた時、二人ともずぶ濡ぬれになって着物の吸いつくよう

にびったり肌にくつついたままの姿で、せいせい息を切らしていた。

## 二

九月朔ついたち日の朝は、南風みなみが真当まとも面に吹きつけて、縁側の硝子戸ガラスを閉めると蒸暑く、あけると部屋のものが舞上あがつて為方しかたがなかった。

養子と一郎は姉妹の相手をして、円座をつくつてトランプをしていた。一郎はしきりに調子づいて、ノオ・トランプを連呼つれよしていたが心の中はおちついてはいなかった。昨夜は、岡部わげが故意わざと二人のために席をはずして撞ぶつ球場きゅうじやうへ行つた後で、翠子を誘いざなつて浜辺に出た。月明なぎさの渚なぎさを霊山ヶ崎まで歩いたが、途中でひたひたの稲瀬川を渡る時は、多少ちゆうち躊躇ちゆうちしている翠子を、無理におぶつて渡つた。夕立が落ちて来た時は、そろそろホテルの方へ帰るところだったが、容赦なく降つて来たのをきつかけに、いきなり相手の手をとつて駆出した。

すくなからぬいたずら気分で、足の遅い女の倒れそうになるのも構わず、逸散いつさんにホテルの葭簀よしず小屋まで駆足を続けた。暗い砂山の下したのその小屋についた時は、一郎さえ呼吸いきが

はずんで口がきけなかつた位だから、翠子は頭から裾までずぶ濡れで、苦しい息づかいをしなから、

「随分ひどいわ。」

と言おうとしても、言葉は唇まで出て来てくれなかつた。雨に濡れた全身に、熱い汗が蒸すように湧いて来た。もう一步も進む気力はなく、手を放せばそのまま膝をついてしまひそうな姿に見えた。一郎は、途中でぬいで左手に持っていた下駄を砂地に捨てると同時に、両手を広げて相手のちいさい体を抱いた。抱きしめると、自分の着物の濡れているのが、殊に強く感じられた。香料の匂う束髪そくはつの額を胸につけて、死んだように動かない翠子の様子に、すっかり安心して、目の前にほの白く見える頸うなじに軽く接吻した。

その時の事を想い出すと、妹の相手をしてトランプなんかしているのが馬鹿馬鹿しくて為方がなかつた。今日も午後からホテルの庭で、岡部と庭球をする約束になつていて、翠子もきつと来ると誓っていたのを考えると、早く午後になればいいと思うばかりだった。自然と、冒険的に骨牌かるたを打つ気分だった。

澤は風邪かぜの気味で鼻をつまらせながら、微熱の体を籐椅子の上に横たえていた。

「澤さんは意気地なしねえ。私だつて昨夜はびしょ濡になつたけれど、平気だわ。」



何事もなかったような晴々した顔附で、養子はトランプの手をやめては冷かしてはいたが、澤は苦笑するばかりで、縁側の外におびただしく延び繁った台湾葦の風に吹かれて白い葉裏をかえすのを見ていた。熱を持って鈍く重たい頭の中で、面白くない事ばかり考えていた。

それは、自分が養子に対して、時機の熟すのを待たなかった事の後悔が主なものであった。先方が、曲淵一家の中にあつて、人一倍自分に親切にしてくれたのは確かだが、それが特殊の意味のあるものだったかどうかはわからない。幸福でない自分の境遇に対して、先も不幸な身の上から、単に同情しているだけなのかもしれない。澤はふと、ついこの間雑誌で読んだ或有名な富豪の立志物語を想起した。

幼くて両親を失い、祖母の手に育てられた若者は、土地の大百姓の家の作男に住み込んだ。その時、その家の女中が、他の男達に対するよりも一倍親切に尽してくれた。どうしてもただの親切とは思われないで、或晩密かに忍んで行くと、女はいきなり横面をひつぱたいて、「身よりもなくて可哀そうだと思つて、目をかけてやれば、つけあがりやがつて、生意気な真似をしやあがる。」と云う意味の言葉<sup>あひび</sup>を浴せかけた。這々の態で逃げ出すと、その夜の中に決心して東京を志し、辛苦の末に百万長者になつたと云う話だつた。

澤は、それが自分の話でもあるような羞恥しゆうちに、思わず知らず顔が火照ほてった。

けれども、又また一方から考えると、養子の示した態度には、横面を張飛ばすような侮辱はなかつた。貴方はまだ学生ではありませんか、そんな事を云う時ではないじゃありませんかと、たしなめる心だつたかもしれない。そう想いかえして、やや救われた心持になる事も出来たが、何にしても自分のひげめを感じるのは、消す事が出来なかつた。

「ハアトでテン。」

突然養子のはしやいだ声に、澤も座敷の方に首を向けた時、

「ノオ・トランプ、テン。」

直ぐさま一郎の上手うわてを行く、勝ほこつた声が聞えた。

その瞬間に、遙かにずしんと響く異様な音響がしたと思う間もなく、大地を揺ゆつて上下動の地震が来た。家はめきめき軋きしみ、畳は湧きかえるように持上つた。

澤は夢中になつて身を起すと、僅わずかに隙間のあつた硝子戸の間から、庭の芝生に一飛びに飛んで出た。足が地面につくと共に、もくもく動く大地の力にはねとばされて転倒したが、その時家の方を見ると、瓦かわらは飛び、硝子は碎け、今にも滅茶滅茶に壊れそうな座敷の中で、四人の立騒ぐ姿がはつきり見えた。一郎は、甲子を引擦ひきずるように抱きかかえて、崩れ落ち

る鴨居の下を潜くぐつて、よろめきながら出て来るところだった。二人が縁側から飛び下りたとたんに、物凄い音を立てて、家は柱を折つて倒潰とうかいした。澤はその家の崩れ落ちる瞬間に、逃げ遅れた乙子をかばつて畳の上に突伏つつぶした養子の姿を見た。

「乙子ちゃん、乙子ちゃん、乙子ちゃん。」

あらん限りの声をしぼつて泣き叫びながら、妹思いの甲子は物狂おしく駆廻かけまわった。澤と一郎は真蒼まつさおになつて顔を見合せたばかりで、一言も物と言う事は出来なかつた。どこから出て来たのか老犬は、おびえ切つた様子で尻尾しっぽを振りながら倒れた家の廻まわりをかけ廻つていた。

「乙子ちゃん、乙子ちゃん、乙子ちゃん。」

甲子は叫びつづけながら、今にも失神しそうな有様で、一郎の胸にしがみついた。裏手の方から、じいや夫婦と女中がかけつけた。

「ちいさいお嬢様は。」

「駄目だ。養子さんと二人共やられちゃった。」

真当面まともにじいやに顔をのぞき込まれるのがいやなので、泣叫ぶ甲子を女中の手に渡すと、一郎はいきなり倒れた家の屋根に上つて、瓦をめぐり始めた。

倒れた家には隙間がなかった。一枚二枚手あたり次第に瓦をつかんでほうり出したが、何の甲斐もない事は直ぐわかった。その上地震はまだ止まないのので、一郎は又芝生に立戻った。

「じいや、人足を多勢呼んで来てくれ。」

何を愚図愚図してると、叱り飛ばす権幕だった。

「若旦那、駄目で御座ります。この界隈には無事なうちは一軒もありやしません。みんなで鋤でも鋤でも持つて来てやつて見る外はありやあしない。」

じいやは曲つた腰を振つて、裏の物置の方に行つた。

一郎も澤も、家のつぶれたのは自分達ばかりでない事に始めて気がついた。あんまり意外な大地震に驚愕して、他人の事なんか考えるひまがなかったのだ。ああそうかと思つて附近を見ると、今まで立っていた方々の二階家も見えなくなって、真青に晴れた空が広々と見渡された。一郎は急に、乙子や養子の外に、一の鳥居の岡部の別荘の安否が気になり出した。

誰も彼も、下敷になつた二人は圧死したものと思つていたが、甲子の外には涙を流す者もなかった。ちつとも勢が衰えず、ひつきりなしに揺れる地震の脅威に、悲む余裕さえな

いのであつた。

澤は、真ま先さきに逃げ出したのが済まない気持はしながら、殆ほとんど気力を失つて、何もする事が出来なかつた。風邪かぜ気で熱のある頭の重たさに悩んでいたので、そんな気持は消えてしまつて、はげしく動悸どうきのする胸を押えて佇たんでいた。彼の頭には、下敷になつた二人の事ばかりが渦巻うずまいていた。殊ことに養子が、むごたらしい死骸になつてしまつた事を想像すると、昨夜の月光を浴びて立っていた姿や、ずぶ濡の姿が嘘であるか、今の地震が夢であるか、どつちか一つに違いないと思われた。

いつまでも地震は止まなかつた。じいやの持つて来た鋤や丸太で、男達はしきりに崩れた家のどこかをこじあげようとしたが、きつしりと組合つたまま落ちた家は、微塵みじんも動かなかつた。芝生に倒れて泣いている甲子ていの側そばで、老犬は空に向つて唸うなるように吠ほえていた。「おや、変な音がするぞ。」

やけになつて、丸太で屋根瓦をなぐりつけていた一郎が、振上げた手をそのまま、澤をかえりみた。海の方から、無数の屋根板を吹き飛ばすような、ばらばらばらばら云う音が聞えて来た。

「海嘯つなみじゃあないか。」

地震の後には海嘯があるといういい伝えと、昔鎌倉に大海嘯があつて、大仏の御堂もさ  
らわれたと云う記録を思い出した。

「海嘯だ。逃げろ。」

耳をすましていた一郎が上ずつた声で絶叫した。女達は一齐に門の方へ駆出した。

一郎は追いつがって、甲子を扶たすけながら、半分落ちた石橋を越えて往来に出たが、もう  
その時は海岸から、必死になつて山手へ逃る人で、狭い道はいっぱいだった。半分水浸し  
になつたのもあり、顔や手足に負傷して、血をしたたらしているのもあつた。

町の店家も、一軒として満足なのはなかつた。両側から倒れて道をふさいでいるのを踏  
越えて、一番近い裏山の松林まで逃げた。見る間に沢たくさん山の人数が、そこに避難して来た。  
幾度も途中で膝をついてしまいそうな甲子を抱えて来た一郎は、自分も息が苦しくなつて、  
大きな松の木の根方に腰を下した。昨夜の雨のまだ乾かない雑草の上に横倒しになつて、  
甲子は又袂たもとで顔をかくして泣き出した。

「乙子ちゃんは、乙子ちゃんは、乙子ちゃんは。」

つぶやくように、祈るように妹の名を繰返していた。一郎は手のつけようもなく、膝を  
抱いて黙っていた。いったんはちりぢりになつた同勢が、澤を先に、じいやを最後にして、

一所に集つた。乙子や養子は、どうせ死んだには違いないが、捨てて逃げて来た氣持がして、誰しも申訳のない心持を持つていた。ここまで来ても、まだ海嘯が来そうな氣がして、口もきけなかつた。別荘のある山の下一帯は、既に全く海になつたであらうと想像してゐた。

後の山はそいだように崩れて、赤い肌が生々しく、なお絶間なく岩石のなだれ落る音が凄かつた。東と西に火の手があがつて、急速に打つ警鐘は、山々に響いてこだました。水に追われた人と、火に追われた人が、今にも大きな地割がして、総ての人類は埋もれてしまふやうに脅かす土を踏んで、松林の中にかたまつていた。素早く戸板や蘆わづを持って来て、飯の場席をこしらえ、怪我人けがにんや子供を寝かしているのもあつた。

「こりやあ、こつちも蘆でも探して来なくちやあなるまい。」

あつちこつち、見知越みしりこしの顔を見付けては、ひそひそ話をしていたじいやが、相談するやうに一郎の顔をのぞき込んだ。

「駄目だよ。もう、うちの近所は海になつてゐるだろう。」

俄にわかに悲しさに堪たえられなくなつた声が著しく震えた。

「なあに海はえらく引いてゐるそうです。二里も三里も干潟ひがたになつたつて云つてます。」

「引いてるって。それじゃあ海嘯は来なかったのかい。」

「来たには来たけれど、直じきに引いてしまったそうです。一寸ちよつと行つて見て参りましょう。」

悟り切つた顔をしているじいやは、いい捨てて歩き出した。

「待つてくれ。僕も一緒に行こう。」

非常な決心を示した態度で一郎は立上つた。

「およしなさいまし。まだぐらぐら揺れてますから。ばあやがあわてて引止めた。」

「なあに、じいやが行ける所なら僕だつて行けるよ。」

「それじゃあ僕も行こう。」

澤も、自分一人安全地に残っているのは心がとがめるので、直すぐに一郎と肩を並べて歩き出した。

「直ぐ帰つて来る。大丈夫だ。もう大きいやつは来やあしない。」

男達がみんな行つてしまうのだと思うと心細くなつて、甲子の泣声なみこが又高くなつた。

松林を出ると、先刻さつき上つて来た一筋の坂が、見るかげもなくなつた長谷はせの町へ真直まっすぐに



続いている。三人は黙々として下つて行つた。どおんと遠くで土の落るような音がすると、間もなくぐらぐら揺れて来る地震も、今ではもう怖くはなくなつていた。一郎も澤も、乙子と養子の無慙むげんな死に對し、又あんまり無雜作むざうさに人間が圧倒された自然現象に對して、腹立たしい自棄やけの心持から、死んでも惜おしくないような氣持だつた。

町筋の倒れた家のあたりでは、一たん逃げたのが又戻つて来て、男も女も家財を取出すのに血眼ちまなこになつていた。もう一揺り来れば、ひとたまりもなさそうな半つぶれの家にさえ踏込んで行く人間の、財貨に強い執着を持つてゐる有様を、一郎も澤も苦々しく思つた。自分達が今行こうとする所には、二人の若い女が死んでゐるのだと思うと、ただその人達が無事でさえいてくれたら、他の事はどうでも天に任せると云う氣持もあつた。

海へ行く道を曲ると、六尺とはない狭いところへ、両側の家の石垣や塀が倒れたり、所々地割のした場所もあつたが、みんなが想像した程水ほどは来ず、別荘のある近所は、僅わずかに浪頭がかぶつた位と見えて、砂地が汚ならしく濡れてゐるばかりだつた。

「浪は来なかつたんだね。」

圧死した二人は、その上に海嘯つなみにさらわれたものと想像してゐたが、それだけは免かれのを知つた。澤は黙つてうなずきながら、目の前に倒れてゐる屋根の下に、紫矢飛白やがすりの

銘仙めいせんの着物に赤い唐縮緬とうちりめんの帯をした乙子を抱いて、白地に秋草模様のゆかたを着た養子が死んでいるのだと思つて暗然とした。

じいやが丹精した花壇は、一段低い処なので、潮の最後の延長が届いたと見えて、まだ濁水の漂つているところもあり、ダリアや菊や早咲コスモスの丈の高いのは根を洗われて倒れ、土を這う松葉牡丹まつばぼたんや脊の低い水引草は砂に半分埋れていた。どこの飼猫か、首輪に赤いリボンを結んだのが、汚れた腹をさらして死んでいた。

三人は台湾葦の繁みが自然の垣根をつくつている庭先へ廻つて行つた。晴れた日の午後  
の芝生は広々と青く日に光つていたが、その真中に、輝くばかり反射する紫の色が、葦の葉の間からはつきり見えた。息の止まる前のような叫声をあげて、三人は一度にかけ出した。

立上つたのは養子だった。足下には紫矢飛白の乙子が、芝草に取とりすが継つがつた形で、真蒼まっさおな顔をしてうづくまつていた。三人の方を見るには見たが、地面から顔を上げる気力はなかつた。しかし生きていると知つたので、一郎は嬉し涙に咽喉のどの詰まつた声で、

「乙子、乙子。」

と繰返しながら、倒れるように膝を折つて、その上に妹の体を抱起した。乙子は、兄の

胸に喰くいついて背中に波を打たせて泣き出した。

側では養子が、異常の脅きようふ怖おそに上ずっていた目に俄にわかにいっぱい涙を浮べて、澤の方に手を差延のばした。澤は躊躇ちゆうちよ躊躇ちよしずしにその手を取つて強く握りしめた。

「いつたい、どこから出て来たの。」

実は死んだと思つていたと云おうとして口をつぐんだ。

「わかりません。たつた一箇所あかりのさしているところがあつたので、そこから出て来たんですけれど、出られたと思う嬉うれしきで夢中になつて、今考えてもわかりません。」

養子の話を聴くと、澤が一番早く庭先へ飛出し、一郎が甲子を引立てて立上つた時、自分も乙子を抱だきあげ上つる積つもりだつたが、足下がきまらないので力が足らず、もういけないと思つた時は、既に天井が落ちて来て、真暗やみになつてしまった。それからその暗闇やみを手探りで、あちらこちら這い廻まわつたが、どこに行つても木材に妨げられて行どまってしまう。誰かが助けに来てくれるものとは思つていたが、その間幾時間たつたものかわからない。不意に明るい外光がさし込んで来たので、ようやくそこまでたどつて行くと、体の出られるだけの隙間まがあつた。先まず乙子を先に出し、自分が続いて外に出ると、助かつたと思う嬉うれしさに、どこから出て来たなどと云う見極めのつく考えなんか毛頭なく、芝生の真中にかけて

行つて、一安心したところだつたと云う。

どこから救いの日光がさし込んだか、三人は養子の心こころあたり当で指さす辺を熱心に見て廻つたが、木材と木材はきつしり喰い合つていて、一寸の隙間さえ見出せなかつた。

養子は手足に少し擦過傷さつかしやうを受けていたが、それも大した事はなく、乙子は異常な恐怖に病的におびえて貧血していたけれど、着物の裾が裂けているばかりだつた。

「とにかく無事でよかつた。愚図愚図ぐずぐずしていて又海嘯が来てやられてはつまらないし、火事もこつちが風下だから、何か持つて行けるものだけ持つて引上げよう。」

一郎は乙子を養子に渡して、じいやと澤と三人で物置の方へ廻つて行つた。

蘆あしと戸板と丸太と繩を持つて、いそいそした心持で松林の避難所に歸つて行つたが、一郎の心には岡部の事がいっぱいだった。乙子と養子が助かつたので、気が楽になると同時に、友達の家の安否たしかを確かなくては済まなくなつて来た。危難にのぞんでいる翠子を救出す勇士の役目に自分をあてはめて考えると、運動で鍛えた体を働かせたくて堪らなくなつた。

「僕は、岡部のところに見舞に行つて来るぜ。」

丁度ちやうど松林の下の坂の上口まで来た時、一郎は思い決して澤に云つた。

「およしなさい。遠走りすると危のう御座いますよ。後でじいやが行って来ますから。」  
 そう云って止めたけれど、一郎の心は既に駆出していた。

「大丈夫だ。直ぐ<sup>す</sup>帰つて来る。」

いきなり両手に持つていたいろんな物をじいやに押しけると、くるりと背中を見せて、正式に練習の積んだ姿勢で逸<sup>いっさん</sup>散<sup>さん</sup>にかけ出した。

### 三

土に敷いた藁の上に、甲子と乙子を取囲んで、澤と養子とばあやと女中達は、変災の話から、お互の無事を祝い合い、又この先<sup>また</sup>どうなるかを心配して、同じような言葉を幾度となく繰返していた。じいやは食料を探しに行つて、なかなか帰つて来なかった。

地震は間断なくやつて来た。そのたびごとに姉妹は抱合つて泣いた。東の方の火事は停車場の方に燃えて行つたが、西の方の火の手は段々迫つて来て、黒い烟<sup>けむり</sup>は松林にもかかつて来た。澤と養子は、万一この山が燃えるような事があつたら、もう逃げ道はあるまいと、心々に思つていた。

養子は着物を短く端折はしよつて、膝から下をむき出しに日に曝さらしていた。徒歩競走の選手だっただけあって、女にしては長く、生れつき色の白い滑なめらかな皮膚に薄青く静脈の透いて見える二本の足は、澤の目の前に艶なまめかしく並んでいた。多分、倒れた家から出て来る時に受けたのであろう。膝頭を擦すりむいている外ほかに、沢山たくさんの擦過傷が、血のあとを残していた。「痛みはしませんか。」

黙って見ているのはかえつてうしろめたくて、澤はわざと眉まゆをしかめて聞いて見た。

「いいえ。ほんのかすり傷ですもの。」

「名譽なごの負傷ですか。」

呑気のんきらしい事を云つたなと思つたが、養子はそれには答ええないで、

「澤さんはひどいわ。私達を扶たすけようとしてもしないで真ま先に逃にげてしまふんですもの。」

と、ふだんの通りの快活な口のきき方で、斬きり込んで来た。何とかうまく引ひっぱさずそうと思つたが、手痛い冗談じやうたんだったので、澤は咄嗟とつさに返事が出来なかつた。自分がいちはやく逃げた事に対して、先刻さつきから心の中で、恥じたり弁解したり、一人で苦しんでいたのだつた。あの場合に、自分は縁側えんがわにいたので、直すぐに庭へ飛下りる気になつたのだが、もしみんなと一緒に座敷にいたら、きつと養子を扶けたに違ちがいない。逃げ道に一番近くいたのが自分

の不運なのだ、彼はひどく悄氣しよげてしまった。

「私達なんか死のうと生きようと、御自分だけ助かればよかつたんでしよう。」

何の悪気もないのであろうが、養子はつけつけと畳みかけた。

「そんな事があるもんですか。」

流石さすがに少しむつとして、澤は養子を真当まとも面に見ながら、やはり弁解の言葉に苦しんでしまった。その様子をじつと見守っていた養子の目には、いたずらな微笑が浮んでいた。澤は逃げるように、視線をそらすと、そこには老犬が疲れた形で長々と寝そべっていた。ふと、畜類の身の上うらやまが羨しく思われた。地震があろうが、火事があろうが、犬は人間程ほど苦しみはしないだろうと思つた。一面には養子に対するまぎらかしもあつて、軽く口笛を吹いてみた。犬は薄目をあいて彼の方を見たが、直ぐに又眠ってしまった。

缶詰類と麵パン麩ンを買込んで、じいやは手柄顔をして帰つて来た。方々で聞いた話を、又みんなに聞かせながら、たつた今人にせがんで貰もらつて来た一本の巻烟草まきたばこを、さも惜おしそうにふかした。

日が西の方に廻つて、松林の中が薄暗くなりかかつた頃、心配していた一郎が疲れ切つて帰つて来た。ただならず緊張したその顔を見ると、皆の胸はどきんとした。

「どうしたの。無事だった。」

澤がきくと、一郎は頭かぶりを振って、

「きようだい共とも死んじやった。家がつぶれて火事になつて焼死んだんだ。」

詳しい話をしようとする積つもりだったが、唇が震えて云えなかつた。一郎は塵の上になつてうつぶせに身を倒したきり、暫時しばらくは動かなかつた。

「まあ、ごきようだい共。」

養子が僅わずかにこれだけ云つたばかりで、みんな暗い心持になつた。甲子と乙子がすすり上げて泣き出した。

横浜の貿易商の子で、当世風の派手好はでずきの兄妹を、養子は平生好きでなかつた。一郎がみつももない程翠子の歡心を得ようとしているのなんか、腹立たしくも思われたが、無慙むざんに死んでしまったのかと思うと、いきいきした表情を持っていた翠子の姿が、いたましく浮んで来た。おもわず涙ぐんだ目を伏せると、長く延ばした自分の脚に、今日の最後の薄日がさしていたが、その擦り傷の血の滲にじんだ所に二疋ひきの蠅はえが止まっているのを見た。そつと手で払つたが又やつて来た。ちいさないきものに対して、養子はむしろ親しい心持を起して、脚を擦り合せたり、翅はねを振つたりしている微妙な運動を見ていたが、今度は追いもし



なかつたのに、ふと一疋が飛んだと思うと、もう一疋の背中に下りた。くるくると二三度もつれあつたと思うと、完全につるんだ。養子はふと、澤の視線が自分の足に落ちているのに気がついて、顔があかくなつた。

澤も気が付いて赤面した。それでも、彼は、岡部の悲惨な死しにざま態や、せっかく恋を得た一郎の気の毒な心に対する同情で胸がいつぱいになりながら、養子と自分が無事で、こうして並んで坐っている幸福を頭の中では強く考えていた。



# 青空文庫情報

底本：「銀座復興 他三篇」岩波文庫、岩波書店

2012（平成24）年3月16日第1刷発行

底本の親本：「水上瀧太郎全集 第三巻」岩波書店

1941（昭和16）年発行

初出：「随筆」

1924（大正13）年1月号

入力：酒井裕二

校正：noriko saito

2019年8月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 九月一日

水上瀧太郎

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>